

『眠れるインド ヴィクシット・バーラト(先進国インド)への障壁』 要旨

『眠れるインド ヴィクシット・バーラト(先進国インド)への障壁』は、化学技術者であり社会思想家でもある著者アマン・シュクラ氏が、母国インドが抱える深刻な問題に警鐘を鳴らし、真の発展への道を問うた書です。

著者は、インドがその偉大な潜在能力を発揮できずにいるのは、社会の根深い問題から目をそらし「眠っている」からだと指摘しています。

以下に、本書で指摘されているインドの問題点、超大国との比較、そして著者の日本に対する見解を要約します。

インドが抱える深刻な問題点

著者は、インド社会の様々な側面に蔓延る偽善と矛盾を、痛烈な皮肉と率直さで浮き彫りにしています。

● 根強いカースト制度

憲法で平等が保障されているにもかかわらず、特に農村部ではカーストに基づく差別や隔離が今なお生活の隅々にまで根付いています。

都市部においても、結婚や就職の際に巧妙な形でカースト意識が影響を及ぼしており、異カースト間の結婚はタブー視され、時には「名誉殺人」という悲劇にまで発展します。

また、歴史的な不平等を是正するためのリザーベーション(優遇措置)制度は、本来の目的を離れ、裕福な層が利益を独占する一方で、真に助けを必要とする貧困層に恩恵が届かないという問題を抱えています。

● 政治利用される宗教と分断

「単一宗教国家(ヒンドゥー・ラーシュトラ)」を目指す排他的な思想が台頭し、インドの強みであるべき多様性が脅かされています。イスラム教徒に対する「反国家的テロリスト」といったステレオタイプがメディアや政治家によって煽られ、共同体間の不信と対立が深刻化しています。

歴史的な出来事(例:シヴァージー対アウラングゼーブ)は、宗教戦争という単純な構図に歪められ、政治的な道具として利用されています。

● 墮落したメディア

かつて民主主義の番犬であったメディアは、権力監視の役割を放棄し、政治家や企業の代弁者と化しています。視聴率至上主義に陥り、失業、貧困、教育といった国民の生活に直結する重要な問題を無視し、宗教対

立やナショナリズムを煽るセンセーショナルな報道に終始しています。

その結果、報道の自由度は著しく低下し、真実を追求するジャーナリストは弾圧されています。

● 崩壊した教育システム

公教育の質が著しく低下し、富裕層は高額な私立学校や海外留学を選ぶ一方で、貧困層は質の低い教育しか受けられないという深刻な格差が生まれています。

学校教育が形骸化し、試験に合格するためだけの「予備校産業」が異常に肥大化しています。その結果、多くの若者は学位を持っても実社会で通用するスキルがなく、「教育を受けた非識字者」として高い失業率に喘いでいます。

● 人間関係の希薄化と精神衛生の危機

都市化と核家族化の進展により、かつて強みであった大家族の支え合いのシステムが崩壊し、社会的な孤立が深まっています。成功への過剰なプレッシャーや孤独から、若者の間では薬物乱用や精神疾患が深刻な問題となっており、世界で最も自殺率が高い国の一つとなっています。

● 社会全体の無責任と偽善

愛国心を叫びながら公共の場に平気でゴミを捨て、女性を女神と崇めながら、の尊厳を軽んじるなど、社会全体に偽善と二重基準が蔓延しています。

災害管理や救急医療システムは機能不全に陥り、本来であれば防げるはずの多くの命が失われ続けています。

超大国との比較

著者は、インドが目指すべき国家像を考察する上で、アメリカや他の国々との比較を行っています。

● アメリカ

著者はアメリカを経済・軍事における世界の超大国と認めつつも、その内情を批判的に見えています。

高い犯罪率、根深い銃社会、人種差別、そして世界幸福度指数では多くの北欧諸国に劣る点を指摘し、経済力や軍事力だけでは国民の幸福な社会は保証されないと論じています。

インドが目指すべきは、アメリカを模倣した単なる超大国ではなく、すべての国民が平和と尊厳のうちに暮らせる「ラーム・ラージヤ」(ラーマ神が統治したとされる理想郷)のような国家であるべきだと主張しています。

● 中国

優秀な人材の海外流出(頭脳流出)という共通の問題に対し、中国が「サウザンド・タレンツ・プラン」のような国家的なプログラムを積極的に推進し、海外の才能を呼び戻すことに成功している例を挙げています。

これに対し、有効な対策を講じず、むしろ人材流出を誇るかのようなインドの姿勢を批判しています。

● スイス

山岳地帯で友人が負傷した際、ボランティアからなる救助隊がわずか15分でヘリコプターで駆けつけた実体験を紹介しています。人命を最優先し、市民が責任感とボランティア精神で社会を支えるスイスの姿を称賛し、災害時でさえシステムが機能せず、人命が軽んじられるインドの現状を厳しく対比させています。

著者が見た日本

著者は日本に対して非常に肯定的な見方をしています。日本での留学経験が、本書を執筆する大きな動機になったと述べています。

著者は日本政府の文部科学省(MEXT)奨学金を得て、横浜国立大学で修士課程を修了しました

その日本での生活を通して、「規律、平等、敬意といった価値観に根ざした強固な制度」を目の当たりにし、これこそがインドが口先では主張しながらも実践できていないものだと言ったと痛感したと語っています。また、公共の場での清潔さや規律についても触れ、日本では子供たちが自分たちで教室を掃除し、市民はポイ捨てをしない文化が根付いていることを称賛しています。

これらの姿は、責任感が欠如し、基本的な社会ルールさえ守られない母国の現状とは対照的であると捉えています。

総じて、著者は日本を、インドが真の先進国「ヴィクシット・バーラト」になるために学ぶべき価値観と社会制度を持つ国として、尊敬の念を持って見ています。